

（寄稿）

# GIGA スクールの先を見据えて

## ～ 情報活用能力を育てるために必要な課題とは ～



磯部 征尊（いそべ まさたか）

愛知教育大学 創造科学系 技術教育講座 准教授

新潟県新潟市出身。兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程修了。博士（学校教育学）。新潟県内の公立小学校教諭，新潟大学教育学部附属新潟小学校教諭を経て，2014年より現職。2018年より学校法人東海学園非常勤講師，2019年より私立名古屋商科大学非常勤講師。主著：『必須化！小学校のプログラミング学習』（学芸みらい社，単著）ほか。

### 1 情報活用能力を身に付けた子供とは？

文部科学省の「小学校段階におけるプログラミング教育の在り方について（議論の取りまとめ）」では、『学ぶ』ことの意義と，これからの時代に求められる力の再確認<sup>1)</sup>において，以下の答申を示している<sup>1)</sup>。

（中略）子供たちが複雑な情報を読み解いて，解決すべき課題や解決の方向性を自ら見だし，多様な他者と協働しながら自信を持って未来を創り出していくために必要な力を伸ばしていくことが求められる。また，その過程において，私たちの生活にますます身近なものとなっている情報技術を，受け身で捉えるのではなく，手段として効果的に活用していくことも求められる。

※波線は，筆者が引いた部分である。

キーワードは，情報技術を受け身で捉えるのではなく，手段として効果的に活用していく力が求められている，ということである。従って，私は，情報活用能力とは，「自ら進んで学び，相手に分かりやすく伝える力」と平易に表現している（図1）。

図1を基に，情報活用能力を身に付けた子供に育てるための3段階を紹介したい。初めに，各学級が，「支持的な学級風土（以下，心地良い学級）」づくりを進めることは，当然大切なことである。その上で，一つ目の段階は，「気付く（知る）」段階である。具体的には，「心地良い学級」において，各授業者は，子供たちに複数の教科でタブレット端末を使う機会を設定する。子供たちには，「学習を進める上で，タブレットを活用した方が便利だ」，という気付きを持たせるのである。二つ目の段階は，「分かる（出来る）」

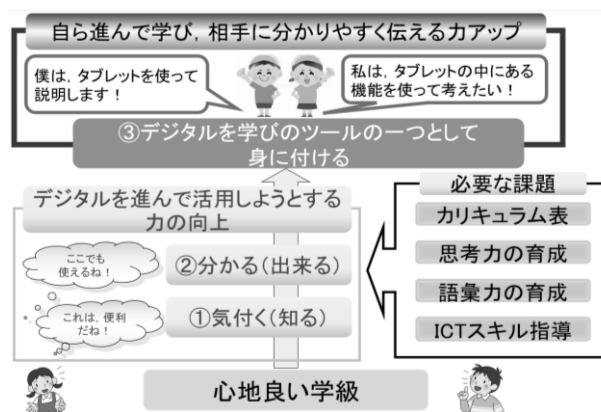


図1 情報活用能力を育てるための3段階

段階である。例えば，国語科の授業で，知らない言葉を調べるために，タブレットを活用した授業を経験した子供が，社会科や総合的な学習の時間等，他の教科でもタブレットを活用する機会を設定する。子供は，「国語科で使ったタブレットの機能が，ここでも使える」，ということに気付く。二つ目の段階を経た子供たちは，「デジタルを進んで活用しようとする力」が向上した姿として捉えることが出来る。三つ目の段階は，「デジタルを学びのツールの一つとして身に付ける」段階である。ポイントは，子供たちに，「分かる（出来る）」実感を毎日継続させていくことである。子供たちは，少しずつ，自らの意思で「僕は，発表会に向けて，タブレットを使って説明します」，というように，相手に分かりやすく伝えるには，どのような手段を用いれば良いのかを考える。また，タブレットを活用した方が効率的かつ，効果的に情報を整理することが出来るのではないかと等と，子供たちは，タブレットをツールの一つとして取捨

